「戦国時代の仮名文書を読む」解説

1　戦国時代のかな文書

戦国武将の手紙の多くは漢字で書かれていますが、女性に対して書かれた書状の中には、全文かな書きの文書も見られます。著名なものは、織田信長が秀吉の正室である「おね」に宛てた手紙（羽柴秀吉室杉原氏宛消息）で、信長が秀吉を「禿鼠（はげねずみ）」呼ばわりしていることでも有名な文書です。文書の内容は、久し振りに安土へご機嫌伺いに参上したおねに対し、沢山の土産への礼を兼ねて、武人の妻としての心がけを諭す言葉を添えて出したものです。女性宛ての手紙ということもあって、全文ほとんどがかな書きになっており、信長の細かな配慮が感じられます。

2　河越合戦と上杉憲政

今回解読したかな文書は、天文 15 年（1546）4 月 27 日に関東管領上杉憲政から赤堀上野守娘へ宛てた書状です。この前年の天文 14 年 9 月（1545）関東管領の山内上杉家（上杉憲政）、扇谷上杉家（上杉朝定）、古河公方足利晴氏、その他関東諸大名連合軍は約 80,000 の大軍をもって北条綱成が籠もる河越城を包囲しました。翌天文 15 年 4 月 20 日（1546 年）の夜、援軍として到着した北条氏康は自軍 8,000 を四隊に分け、そのうち一隊を戦闘終了まで動かないように命じて、残り三隊を率いて敵陣へ夜討ちを掛け、上杉連合軍に突入、上杉軍は大混乱に陥り、扇谷上杉軍では当主の上杉朝定、難波田憲重が討死、山内上杉方では上杉憲政はなんとか戦場を脱出し上州平井城（群馬県藤岡市）に敗走しましたが、重鎮の本間氏や倉賀野氏、本文書に見える赤堀氏らが討死しました。河越夜戦の激戦地と伝えられる東明寺（川越市志多町）の境内には、河越夜戦跡の碑【写真】が建てられ、将兵の遺骸を納めたという富士塚も残っています。

河越夜戦の碑

【出典文書について】

・赤堀文書・・　赤堀文書は、文書館が収集した文書で 2 点当館に収蔵されています。他の 1 点は長享 2 年の上杉顕定書状。赤堀氏は上野国赤堀（群馬県伊勢崎市）出身の武士で、戦国時代は関東管領山内上杉氏家臣。なお、群馬県立歴史博物館にも戦国期の赤堀文書数点が所蔵されています。

【内容解説】

文書に登場する赤堀上野（あかぼりこうずけ）の祖である赤堀氏は現在の群馬県伊勢崎市赤堀出身の武士で、淵名荘を支配していた淵名氏の一族でした。観応の擾乱（かんのうのじょうらん）で活躍し、足利尊氏から恩賞を受けます。その後、上杉氏が上野国の守護になるとその支配下に入り、たびたび戦闘に参加しました。

先述した河越合戦において、赤堀上野介は関東管領山内上杉氏の家臣として参陣しますが討ち死にしてしまいます。そこで、赤堀氏の後継者の男子が不在の場合、家が絶えてしまうため、本文書に見えるような「名代職」が立てられました。これは代理人、身代りという意味です。また家督相続の際に、一時的に家督を継がせるときに立てられた男子の養子のことを名代家督といいましたが、本文書の場合は、「おふなこ（女子）のことに候とも」、とあるように男子ではなく戦死した親の赤堀上野」の娘が名代家督となった極めて希有な例といえます。

なお、赤堀家ではその後、新たな男子の家督相続が行われたとみられ、永禄 13 年(1570)に上杉謙信から赤堀周辺の地を与えられています。天正 12 年（1584）に小田原北条氏が太田金山城（群馬県太田市）の由良氏を服属させ、上野国をほぼ全域を支配すると赤堀氏も北条方に属して各地の戦闘に参加しましたが、天正 18 年（1590）の小田原落城後は土着しています。